

人間主義と形而上学 ——人間性をめぐるハイデガーとレヴィナスの対決——

小手川 正二郎 (國學院大學)

kotegawa@kokugakuin.ac.jp

はじめに*——なぜいま「人間主義」か？

現代において、人間主義 (ヒューマニズム) を声高に主張することほど反時代的なことがあるだろうか。一方では、人間性の尊重を謳うことであらゆる束縛や差別から人間を解放する類の人間主義は、時代の流れの中でその役割をすでに終えたように見える。他方、人間主義はつとにその限界が指摘されている。ある属性をもつものを「人間」として認めることは、その反面で、当の属性をもたないものを「人間」という集団から排除することを含んでおり、人間主義は「人間」として認められない集団 (重度障害者、動物、自然) の「非人間化」や「人間のための使用」と一体をなしている、とされる。人間主義はもはや当たり前となったことしか述べておらず、その偏狭さを指摘することが、現代の開かれた精神を示すことになるかのようだ。

半世紀近く前、レヴィナスが「人間主義と無起源」(1968年)をはじめとする『他なる人間の人間主義』(1972年)に収められることになる論考を書いたときも、事情は全く同様であったと思われる。レヴィナスは自らの論考を「人間主義という言葉にまだなおたじろいでいないか、もうすでにたじろぐことをやめた反時代的考察 (considération inactuelle)」(HAH 11)と呼んでいる。ただし、すぐさま彼が付け加えているように、この「反時代的考察」は、現在進行形の問題 (l'actuel) を無視したり、否定したりする「反動的」なものではなく、支配的な伝統や——しばしば伝統に没入しながらそれに反抗したつもりになっている——時代の潮流とは異なる仕方で思考しようとするものだ。

反時代性とたんなる反動を分けるのは、いかなる点にあるのか。例えば、フェリーとルノーは、『68年の思想』(1985年)において、ポストモダンの「反人間主義」が自律に基づく近代哲学の人間主義の限界や一面性を強調し過ぎた結果、人間主義自体を否定してしまった点を非難している¹。彼らの主張には、今日なお傾聴に値する点が残されていると筆者は

* ハイデガー、レヴィナス、サルトルの著作からの引用には、以下の略号を用いた。

Martin Heidegger, GA 9: *Brief über den Humanismus*, in: *Gesamtausgabe*. Bd. 9, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1976. (『「ヒューマニズム」について』、渡邊二郎訳、筑摩書房、1997年)

Emmanuel Levinas HAH: *Humanisme de l'autre homme*, Montpellier: Fata morgana, 1972. AE: *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 1974, Livre de poche.

Jean-Paul Sartre EH: *L'existentialisme est un humanisme* (1946), Paris: Les Editions Nagel, 1952. (『実存主義とは何か』、伊吹武彦訳、人文書院、1955年)

¹ 「スターリンが1936-1938年の「大粛正」をおこなったのは、彼がまだ人間主義的でありすぎ

考えているが、彼らが自らの擁護する「人間主義」の意味を徹底的に考えられているとは思えない。近代の人間主義を誰よりも厳しく批判すると同時に、人間の人間性について従来とは異なる仕方でも思考しようとしたハイデガーと向き合い、たんに従来の人間主義に逆戻りするのではなく、ハイデガーと異なる思考の道を(ハイデガーと同程度の体系性を通して)提示できているのか——この「対決」の有無にこそ、反時代性と反動を分ける点が存すると思われる。そして、筆者が考えるに、ハイデガーとのこのような「対決」を試みたのは、ハイデガー主義者たちでもデリダでもなく、レヴィナスである。本論は、このような見立てのもと、(1) 人間主義について問題にする際にハイデガーの主たる批判対象であったサルトルの『実存主義は一つの人間主義である』の論点をまとめ、(2) ハイデガーによる人間主義(とりわけ実存主義的人間主義)への批判の眼目と、ハイデガー自身による人間性再考の試みを再評価する。そして、(3) レヴィナスによるハイデガーとの対決を幾つかの論点に絞って検討し、レヴィナス自身の「他なる人間の人間主義」の哲学的意義を再考することを試みる。

1. サルトル『実存主義は一つの人間主義である』(*L'existentialisme est un humanisme*)

議論の大前提として、ハイデガーが(おそらく唯一)目を通したサルトル『実存主義は一つの人間主義である²⁾(講演 1945年、出版 1946年)の要点を(本論に係わる点に絞って)挙げる³⁾。

- ・冒頭で述べられているように⁴⁾、当時流行語になりつつあり、様々な意味で用いられた「実存主義」への幾つかの誤解や誤解に基づく批判に応えることを目的とする。
- ・代表的な誤解：実存主義は行為を不可能とみなし、絶望による静寂主義(*quiétisme*)に帰着する。静寂主義は贅沢の証である以上、ブルジョワ哲学である。
- ・実存主義をキリスト教的実存主義と(哲学的議論に神を導入することを拒む)無神論的実存主義の二種類に分け、後者にハイデガーとサルトル自身を分類する(EH 16-17)。

「両者〔二種類の実存主義〕の共通点はただ単に、実存は本質に先立つ(*l'existence précède l'essence*)、あるいはこう言った方がよければ、主体性(*subjectivité*)から出発せねばなら

たからなどと言えるだろうか。また一方、ハイデガーがナチ党にくみし、とりわけ『A・ヒトラーへの大学教授たちの信仰宣言』を公表したりできたのは、1933年の時点で彼がまだ十分に人間主義を脱構築していなかったからだと言っても、誰がそんなことを信じるだろうか(リュック・フェリー、アラン・ルノー『68年の思想』、小野潮訳、法政大学出版局、1998年、11頁)。

²⁾ 日本では『実存主義は人間主義である』と訳されることが多いが、「一つの」(*un*)という表現が本講演でもつ意味をとらえ損ねているように思われる。

³⁾ 「ヒューマニズム」論争の真の主題ともみなされる「歴史性」については、稿を改めて論じる必要がある。齋藤元紀「ヒューマニズムの余白——ハイデガーとサルトル」、澤田直編『サルトル読本』、法政大学出版局、2015年所収、参照。

⁴⁾ 「ここで私は、実存主義に向けてなされてきた幾つかの非難に対して、実存主義を擁護したいと思う」(EH 9)。

ないと両者が考えているという点にある」(EH 17)。

- ・用途や目的に沿って「何であるか」(本質)が規定されてから、生み出される事物とは対照的に、人間の場合、まず存在し、次いで自らのあり方を選択していく⁵。この自らのあり方を選択し、作り出していく点に「主体性」が見出されている。
- ・ただし、ここでいう「選択」(自らのあり方を未来に投げ入れるという「企投」)は、意図的選択の手前にある「自覚せぬまま特定のあり方を選び取ってしまっている」という次元で考察されている。

「[...]人間は自らがそうあろうと企投したものとなる。自らがそうあろうと意志したものではない。なぜなら、われわれが通常、意志(vouloir)といているのは意識的な決定のことであり、これはわれわれの大多数にとっては、人間が作り出した自分のあり方の後に生じるものだからだ。私は党に加入したり、本を書いたり、結婚したりすることを意志するが、これらはすべて、意志と呼ばれるものよりも原初的で自発的な選択(choix plus originel, plus spontané)の現われにすぎないのだ」(EH 23-24)。

- ・この「選択」は個人の恣意的な選択にとどまらず、特定の間観に与する(commit)ことを含意する。

「われわれが、人間は自らを選択するというとき、われわれが意味するのは、各人が自らを選択するということであるが、しかしそのことによってまた、各人は自らを選ぶことで全人間を選択するということも意味している。実際、われわれの行為のなかで、われわれがそうありたいと望む人間(l'homme que nous voulons être)を創ることによって、同時に、人間はそうあるべきだとわれわれが考える、そのような人間像(image de l'homme tel que nous estimons qu'il doit être)を創らない行為は一つとしてない」(EH 25)。

- ・実存主義はいかなる「人間主義」なのか?
 - ・実存主義は、人間の何らかの本質(人間本性)から出発する本質主義的人間主義に対する明確な拒絶をなす⁶。
 - ・また、サルトルは特定の間を究極の目的とする類の人間主義が、それ以外の人間のあり方を否定することで自己閉鎖的になる点を否定し、そのような人間主義と実存主義的人間主義を明確に区別している。

⁵ 「このこと〔「実存が本質に先立つ」ということ〕が意味するのは、人間がまず先に実存し(l'homme existe d'abord)、世界の内では出会われ、不意に姿を現し、その後で定義される(il se définit après)ということだ。実存主義の考える人間が定義不可能であるのは、人間が最初は何ものでもないからだ。人間は存在した後でのみ何かになるのであり、しかも自分が作り出すあり方になるのだ」(EH 21-22)。

⁶ 「〔本質主義的人間主義によれば〕人間は人間本性(nature humaine)を持っており、この人間本性すなわち人間の概念は、すべての人間に見られるものだ。このことが意味するのは、各々の人間は「人間」という普遍的概念の一個別例であるということだ。カントの場合、この普遍性から帰着するのは、野蛮人や自然人もブルジョワと同様、同じ定義を強いられ、同じ基本的性質をもつということだ。従ってこの場合も、人間の本質は、われわれが自然の中で出会う歴史的事実に先立っているのだ」(EH 20-21)。

「実を言えば、人間主義は非常にちがった二つの意味を持っている。人間主義という言葉によって、人間を究極の目的として、最高の価値として考える理論を意味することも出来る。例えばコクトーにはこの意味での人間主義がある。彼の物語『八十時間世界一周』のなかで、一人物が、飛行機で山を飛びこえるからといって、「人間は素晴らしい」と公言する場合がそれである。このことが意味するのは、飛行機を作らなかった私自身が、この特別な発明の恩恵に浴し、人間である限りで、自分自身が幾人かに特別な行為の責任を負ったり、その名誉を得られたりすると思うことがありうるということだ。

〔...〕実存主義者は人間を決して究極目的とは考えない。人間は常に作られるべきものだからだ。われわれはオーギュスト・コントのように、われわれが礼拝しうような人間性があるなどと信じるべきではない。人間性の礼拝は、コントの自己に閉じた人間主義、もっと言えばファシズムに帰着する。それはわれわれの欲しない人間主義である」(EH 90-92/73-74 頁)。

*本論冒頭に述べた類の人間主義批判は、しばしば読み飛ばされるか過小評価されるサルトルの主張から一步も出ていない。

- ・実存主義的人間主義：存在者としての人間の特性（生物学的本質、集団的アイデンティティー）に依拠することなく、自己の外にある世界との係わりのなかで人間性を（意図的ないし非意図的な形で）創出していく人間主義

「しかし、人間主義には別の意味があり、それが意味しているのは結局以下のことである。すなわち、人間は絶えず自分自身の外にあり、人間が人間を実存させるのは自分自身を企投し、自分の外部で自己喪失することによってである。他方、人間が実存しうるのは、超越的な目的を追求することによってである。人間はこのような乗り越えであり、この乗り越えに関連してのみ対象を捉えるのであるから、人間はこの乗り越えの核心ないし中心にある。人間を構成している超越（transcendance）——神が超越的であるという意味ではなく、〔自己の〕乗り越え（dépassement）という意味での超越——と、人間は自己自身に閉じることなく、つねに人間的な世界に現前しているという意味での主体性とのこの結びつきが、われわれが実存主義的人間主義と呼ぶものだ。人間主義というわけは、人間以外に立法者がおらず、そのような打ち捨てられた状態においてこそ人間が自分自身について決定するということを人間に思い起こさせるからだ。そして、人間がまさしく人間として自己を実現することになるのは、自身の方へと振り返ることによってではなく、つねに自身の外で何らか個別的な解放や実現をなす目的を探求することによってであることを示しているからだ」(EH 92-94)。

- ・実存主義は、人間を企投とみなし、行為全体（行為を通じて生み出された自己および生み出されつつある自己）とみなす以上、静寂主義とは対極に位置する⁷。

⁷ 「人間は自らの企投以外の何ものでもないし、人間は自己を実現する限りにおいてのみ実存する。それゆえ人間は自らの行為の総体ないし人生以外の何ものでもないのだ」(EH 55)。

2. ハイデガー『「人間主義」について』(Brief über den Humanismus, 1946)

- ・当時無名だったジャン・ボーフレ (1907-1982) から書簡の形で寄せられた質問への返信
ボーフレの問い
 - (1) どのようにして「人間主義」という語にある意味を与え直すべきか?
 - (2) 倫理学が可能だとすれば、存在論と可能な倫理学との関係とは?
 - (3) 哲学に含まれる冒険の要素をどのようにして救い出すべきか?
- ・政治的な観点から読み解くことも可能だが⁸、以下では、人間主義についてハイデガーがまとまった形で述べている哲学的考察として読解する。
- ・そこでハイデガーは、反人間主義を標榜しているのではなく、従来の人間主義が人間の人間性を充分思考できていないとしている

「むしろ、『存在と時間』の眼目をなす唯一無比の思想は、人間の本質に関する最高の人間主義的諸規定でさえも、人間の本来の尊厳をまだ知ってはいないという点にあるのである。そのかぎりにおいて、『存在と時間』における思索は、人間主義に反対している。けれども、この対立は、だからといって、そうした思索が、人間的なものの反対側に与るとか、非人間的なものを支援するとか、非人間性を擁護するとか、人間の尊厳を下落させるとかするものであるということを、意味してはいないのである。人間主義に反対して思索がなされる理由は、人間主義が、人間の人間性 (humanitas) を、十分に高く評価していないからなのである」(GA 9, 330)。

行為の本質

- ・冒頭: 「行為」の本質が十分に考え抜かれていない
ボーフレが書簡の冒頭で、サルトルのいう参与 (engagement) を念頭において、ヴァレリーの「行為の信奉者たち」(zélateurs de l'action) という表現を引用したことへの応答⁹。
- ・行為の本質は、存在と人間への係わりを「前に導く」(producere) こと、実らせ達成する (vollbringen) こと
⇨行為は行為の結果生じる効果の有無やよし悪しで判断されている: 生み出される存在者との係わりにおいてのみ捉えられている。サルトルのいう行為も生み出される存在者 (自己) のレベルで考えられている?

⁸ 『「人間主義」について』執筆の経緯やハイデガーの思惑および同書がもたらした結果については、トム・ロックモア『ハイデガーとフランス哲学』、北川東子・仲正昌樹監訳、法政大学出版局、2005年、第5章に詳しい。ただし、ハイデガーの意図がもっぱら大戦間の自身の汚名をそぐ点にあったとする見方については、もしそうであったなら当時無名の学生であったボーフレに対して、改悛の念を示したわけでもない書簡を送ったという事実を看過することになるというジャンコーの指摘は正鵠を射ている (Dominique Janicaud, Du bon usage de la *Lettre sur l'humanisme*, in: Bruno Pinchard (dir.), *Heidegger et la question de l'humanisme: faits, concepts, débats*, Paris: PUF, 2005, p. 217)。

⁹ Dominique Janicaud, *L'humanisme dans les turbulences*, in: *Heidegger en France* tome I, Paris: Albin Michel, 2001.

- ・存在による人間との係わりをあるがままの形で保護する(≠放置する)という形で言葉にもたらず思索は、行為の最たるものである¹⁰。

⇨思索の技術(テクネー)的解釈:

技術(手段/目的)という観点から思索を実践から分離し、後者を目的とした手段として前者を非実践的もの(考量)にしてしまう解釈

実存 (Existenz)

- ・人間の本质を規定する人間主義への批判:サルトルと共有
「人間=理性的動物」:「理性的」・「動物」といった概念が十分に理解されないまま、動物に「理性」という属性が付加された形で、「動物性」(animalitas)から(あるいはその延長線上で)「人間性」(humanitas)が理解されてしまっている。
- ・「実存は本質に先立つ」の問題点:伝統的な概念図式(本質が実存に先立つ)を逆転させているだけで、その前提をなす「存在」の意味や「実存」と「本質」への分裂の意義が理解されていない
「サルトルは、これとは違って、実存主義の根本命題を、次のように言明している。すなわち、実存は本質に先行する、と。その際、サルトルは、existentia(現実存在)とessentia(本質)とを、形而上学の意味において受け取っている。この形而上学は、プラトン以来、次のように言い述べている。すなわち、essentia(本質)はexistentia(現実存在)に先行する、と。サルトルは、この命題を逆転させたわけである。けれども、一つの形而上学的命題を逆転させたとしても、その逆転はやはり一つの形而上学的命題にとどまっている」(GA 9, 328/50-51頁)。
- ・サルトルにおいては、本質と実存の対は、伝統的な枠組みのもと、可能性とその現実化(実現)の意味において理解されている。
- ・サルトルにおける超越(transcendence)は、自己の外の世界との係わりとして捉えられているが、それは自己の外部の存在者との係わりにとどまる
⇨ハイデガーのいうEk-sistenzとは、自己の内から外への運動を意味するわけではなく、存在と存在者の区別が際立つ場にとどまることを意味する¹¹。
- ・「人間とは誰か・何か」という問いは、人間を人格的なもの(Personhaft)や対象と決めて

¹⁰ 「[思索という]この行為は、おそらく、最も単純でありながら同時に最高のものである。なぜなら、それは、存在の人間への関わりに関係するからである。ところが、結果を生み出そうとするすべての作用は、存在のうちにもとづきながらも、存在者を目指すことになる。これに反して、思索は、みずからを放棄して存在によって語りかけられ要求されるままの状態にして、まさにその存在の真理を発語しようとするのである。思索は、この放棄(Lassen)を、実らせ達成するのである」(GA 9, 313)。

¹¹ 「Ek-sistenzが内容上意味しているのは、Hin-aus-stehen in die Wahrheit des Seinsである」(GA 9, 326)。(*) Auflage 1947: “Hinaus”: hin in das Aus des Auseinander des Unterschieds (das Da), nicht “hinaus” aus einem Innen.

かかっている¹²。

主体性

「しかし、ここで、謎めいたことが現れてくる。すなわち、人間は、被投性のうちにあるということだ。そのことが意味しているのは、次のことである。すなわち、人間は、主体性にもとづいて捉えられる人間と比べれば、まさにそれよりも、より以下であるのだが、その分だけ反対に、〔存在への〕開きにとどまっている存在の投げ返し (der ek-sistierende Gegenwurf des Seins) である点では、理性的動物であるよりも、より以上のものなのだ。人間は存在者の主人 (Herr) ではない。人間は、存在の牧人 (Hirt) なのだ。この「より以下」という点で、人間はなにものをも失わず、むしろ、人間は、存在の真理のうちへと至ることによって、得をするのである。人間は、牧人の本質的な貧しさ (Armut) を得るのであり、牧人の尊厳は、存在そのものによって存在の真理の見守りのうちへと呼ばれているという点に存する」(GA 9, 342)。

- ・サルトル：人間による自己超越：世界との主体的な係わり

ハイデガー：人間は存在との係わりに投げ入れられている (被投性)

能動的ではないという基準から見ると「より以下」

存在との係わりという基準から見ると「より以上」

- ・「存在の牧人 (Hirt)」としての人間

「人間は存在者の主人ではない」⇔サルトルの人間主義

世界：人間が主体的に創り出していくもの

- ①人間が自分自身の主体性に閉じこもるなら、人間は存在しているものの豊かさから眼を背け¹³、世界を人間が自由にしていよものとして捉えてしまう。

* 言葉によって世界を見守る・いたわること——言語観の転換

詩：個人が居合わせた世界の表現≠個人の内面 (主観、感情) の表現

言語：世界の表現≠他人とのコミュニケーションツール

「言葉の世界とは、何も言語を用いて、語る、書く、話す、ということではなく、言葉として了解される存在の根源的な開示の中に立ち、それを見守り、いたわることなのである」(渡邊二郎『ハイデッガーの存在思想』、『渡邊二郎著作集』第二巻、筑摩書房、2011年、251頁)。

- ②牧人の「貧しさ」とは？

「真に貧しく〈ある〉こととは、すなわち我々が、不必要なものを除いては何も欠いて

¹² 「というのも、誰であるかとか、何であるかなどと問う場合には、私たちはすでに、何らかの人格的なものや対象を見込んでいるからだ。しかしながら、人格的なものは、対象的なものに劣らず、das Wesende der seinsgeschichtlichen Ek-sistenz を逸すると同時に遮断している」(GA 9, 327)。

¹³ Cf. Dominique Janicaud, *L'homme va-t-il dépasser l'humain ?*, Paris: Bayard, 2002, p. 21.

いないという仕方でも〈存在する〉ことを言う¹⁴」

必要：生命の維持に必要なもの、生命の維持を強制するもの

不必要なもの：必要性・強制から生じるのではない、存在への自由な開かれ

⇒生に必要なものに埋没するとき、自分を存在させているものから眼を背け、世界の一面（有用性）にしか目を向けなくなる¹⁵。

「たとえば飢饉であったり、収量不足の年が続くことが危険なのは、西洋の命運全体とその本来性の観点から考察するならば、おそらく、多くの人間が生命を失うからなのではけっしてなく、むしろ生き延びる者たちが、生の糧とするものを食べるためにのみ生きていくからなのである。そのような「生」は、独自の空虚さにおいて自分自身のまわりを空転する生である」（マルティン・ハイデガー『貧しさ』、西山達也訳、藤原書店、2007年、23頁）。

パトチカ——ハイデガーの人間主義の具体化

- ・パトチカはハイデガーを、動物性からではなく人間性（非主体性）から人間を思考することを試みた「人間についての思想家」とみなす¹⁶
- ・歴史についての思索：歴史とは人間が作り出したものでも、人間の目の前で繰り広げられるスペクタクルでもなく、非主体的な形で捉えられた人間と世界との関係そのもの¹⁷。
- ・犠牲：（未来の）平和のための戦争という循環を断ち切るもの
平和な生からの完全な自由¹⁸：人間を最も人間たらしめるもの

「平和と昼は、進歩や、自由で加速する発展や、今日存在しない可能性という形での未来の昼を、他の者たちに確保するために、人々を死に送るというやり方で支配しなければならない。これらの犠牲になる者たちからは、逆に、死に直面した忍耐が要求される。それが意味するのは、生がすべてではなく、生は自らを放棄しようということが暗に知

¹⁴ マルティン・ハイデガー『貧しさ』、西山達也訳、藤原書店、2007年。（1945年講演）

¹⁵ 「実際に現代社会は、政治や経済や教育、技術や情報や交通など、あらゆる活動領域で、そうした人間の意図や目的に基づく操作と管理と支配の論理が浸透している。しかし、その反面、そのような行為に日夜奔走する当の人間そのものがどこにその本来の居場所を持つのかという問いは、忘れ去られたままである。人間の居場所が問われるとすれば、それは皮肉にも人間の行為や実践が難局に直面し破綻した時である。2011年に起きた東日本大震災の後、日本では、人間の在り方や生き方を考え直す機運が高まっているが、これこそハイデガーが示唆した方向、つまり、存在者ではなく存在への関係を思い起こす思索の方向に共鳴するものである。あれこれの目的に従属した行為よりも、自分の居場所を思い起こす思索の方が人間にとってはるかに重要な行為であろう」（菊池恵善「思索という行為——『「ヒューマニズム」について』『何が思索を命ずるか』、秋富克哉・安部浩・古荘真敬・森一郎編『ハイデガー読本』、法政大学出版局、2014年所収、245頁）。

¹⁶ Cf. Françoise Dastur, *La phénoménologie et la question de l'homme: Heidegger et Patočka*, in: *La phénoménologie en questions : Langage, altérité, temporalité, finitude*, Paris: Vrin, 2004.

¹⁷ ヤン・パトチカ『歴史哲学についての異端的論考』、石川達夫訳、みすず書房、2007年。

¹⁸ 以下の論考は根本気分（の共有）という観点から、ハイデガーとパトチカを連続的に捉える視点を提供している。陶久明日香「世界の意味喪失の経験は共有できるか——ハイデッガーとパトチカを手引きとして——」、『実存思想論集』XXXII号、理想社、2017年所収。

られている、ということである。[...] テイヤール〔・ド・シャルダン〕が示しているように、前線の参加者を突如として襲うのは、完全な自由、平和と生と昼のあらゆる関心からの自由である。即ち、これらの犠牲者たちの犠牲が持つのは相対的な意味ではなく、それは、建設、進歩、生の可能性の向上と拡大といった綱領への要求された道ではなくて、ただそれ自体で意味をもつのである」(ヤン・パトチカ『歴史哲学についての異端的論考』、石川達夫訳、みすず書房、2007年、199頁)。

3. レヴィナスの「他なる人間の人間主義」

- ・ハイデガーによる人間主義批判の継承

レヴィナスはハイデガーの批判者とみなされることが多いが、ハイデガーの人間主義批判を最大限評価している

「存在の意味にとって、自己自身の自由な目的である人間の人格に帰せられる優位を否定する現代の反人間主義は、自らに与える理由を越えて正しい。[...] 現代の反人間主義の見事な直観は、自己目的かつ自己起源である人格という考えを廃棄した点に存する。この考えにおいては、自我はなお何らかの存在であるがゆえになお事物である。

「[...] 人間主義は、それが十分に人間的でないという理由においてのみ、告発されねばならないのだ」(AE 203)。

行為

- ・行為は特定の方向性 (orientation) を有する

文脈や状況に応じて様々に解釈可能な行為や発言に意味を与えるのは、誰かから誰かへという方向性である(「信号は赤だ」が警告として受け取られるか、詩的表現として受け取られるかは、語り手と受け手との関係による) ≠ 言葉をたんなる伝達とみなす言語観

- ・この方向性は、相手に受け取ってもらうことが確証されていない一方的な語りかけであり、相手からの感謝を求めない慈善行為 (Euvre) に等しい

「〈同〉から〈他〉へと自由に向かう方向性 (orientation) とは、慈善行為である」(HAH 41)。

「〈他〉への絶対的な方向性、すなわち意味 (sens) をなす行いが可能であるのは、ただ〔一切の満足や期待を欠いた〕忍耐においてでしかないが、この忍耐が極限まで推し進められると、それが行為者にとって意味しているのは、〔行いの〕実現と同時代であることをあきらめること、〈約束の地〉へと足を踏み入れることなく行為することなのだ」(HAH 42)。

⇒ 思索・行為の技術的な解釈 (cf. HAH 41) からの脱却の試み

主体性

- ・ハイデガーにおいて人間の主体性が世界のある種の「媒体」とみなされている：主体性は

もっぱら存在の側からのみ考えられる¹⁹

⇒各人の唯一性を考える余地がなくなってしまうのでは²⁰?

「真理を発見し、探求し、所有するのは、なんだかわからない自分の使命をもつ人間の方ではない。真理の方が人間を惹き起こし、(人間に起因することなく)人間を保持している[...]。たとえ人間の実存(exsistence)——現存在——がこの実存そのものために実存する点に存ずるとしても、この[存在への]開きにとどまる実存(ek-sistence)が身を捧げるのは、存在者ではない存在の守護・照明・隠蔽・忘却であり、こうした運動や変動が人間的なものを惹き起こし、位置づけるのだ。主体性は、自分自身の消失を目指して現れることになる[...]」(HAH 70)。

- ・内面／外面を前提とする主体性の形而上学とは異なる仕方で主体性を再考する

「したがって次のように問うことが許される。存在が自由に科す否認を突き詰めて考えるなら、人間主義は何らかの意味をもつことはできないのだろうか。人間的なものの根拠薄弱さは、[存在に対する]人間的なものの受動性において現れるように見えるが、この受動性自体から出発して、自由それ自体にある意味(確かに「裏の」意味ではあるが、この場合は唯一本来的な意味)を見出すことはできないのか、と」(HAH 73)。

: 従来の能動性／受動性の枠組みでは捉えきれないあり方の記述

⇒原因／結果、意識／物体に回収されない「受動性の新たな概念」の必要性(HAH 73)

「存在の裏面と係わるような受動性、存在が自然として措定される存在論的次元に先立つ受動性であり、いまだ外部なき創造の先行性、超自然的という意味での形而上学的(méta-physique)先行性に係わる受動性である」(HAH 73)。

- ・自分の立場や過去の行為との因果性から引き受けられる責任とは区別される、無起源的な責任: 責任を引き受けるかどうかに関する自由な決断の手前で生じている主体性

「他なる人間の人間主義」(humanisme de l'autre homme)

- ・他人との倫理的係わりは、自己と同種の能力(知能)や属性(国籍・性別)が他人にあることや、他人との相互的な契約関係が成立していたりすることを前提としない。

¹⁹ 「このような知的整序を探求するよう召喚される思考主体は、かかる探求が能動的かつ自発的な探究であるにもかかわらず、自己を整序し、そうすることで真に現われるために、真理のうちに現われるために、存在の存在することが経る迂路として解釈される。知解可能性ないし意味することはあくまで存在の遂行そのものに、存在すること(essence)それ自体に属している。したがって、万事が同じ側に、存在の側にあることになろう。主体に委ねられているにもかかわらず、この主体を吸収しようという可能性こそ存在することの本義なのだ。すべてが存在することのうちに閉じ込められてしまう。また、存在を前にして消失すること、それが主体の主体性の常なる本義であることになろう」(AE 210)。

²⁰ 「ハイデガーは形而上学的主体だけでなく、そうした主体の個別性も消滅させてしまった。存在を重要視することでハイデガーは、異なった人間存在において個別的なもの、彼らを芸術家、詩人、等々であらしめているものを、維持しておけなかったのである。第二に、ハイデガーは「存在は自発的に、自らによって、自らを通して、自分自身を顕わにする力を持つことだろう」(Michel Haar, *Heidegger et l'essence de l'homme*, Grenoble: Million, 1990)。ロックモア前掲書 230 頁からの引用。

例：ある子供が助けを求めている時、その子が何らかの知能をもっていることや、社会的拘束（子供を見捨てたことで罰せられる・不評を買う可能性）を理由に手を差し伸べるなら、それは倫理的係わりとは異質なものである。

⇒子供からの訴えかけを私が受け取っているという事実それ自体が、その子に手を差し伸べる理由となる

：このような倫理的要請の訴えとして他人が現れうること、またそのような現れを自我が受け取りうることにこそ人間関係のうちでのみ生じうる「人間性」がある

「〔他人に〕〈無関心ではいられないこと〉とは、隣人の近しさであり、それによってのみ一方と他方の間の共通の地盤が描かれるのだが、この共通の地盤、人間の類の統一性は、人間たちの友愛（fraternité）のおかげであるのだ」（HAH 14）。

⇒生物学的分類や特定の属性や能力（自己意識）の同定には依拠しない、具体的な他人に対する無起源的な責任から出発する人間主義：他なる人間の人間主義

・「人間」の境界（胎児、動物の権利）に関する議論：特定の属性や能力の同定から出発し、能力に応じて「平等な利益の配慮」や権利を割り当てる傾向がある（シンガー）。
*ハイデガーの「動物は世界貧困的である」という主張にも同種の観点から批判をなげつける人々がいる（高等動物の言語能力など）。

・レヴィナスの「他なる人間の人間主義」は、こうした類の議論と一線を画する。それは、人間という存在者に特定の能力（例えば他人に対して責任を感じる能力）を認めたい。あえて言えば、レヴィナスの人間主義は、とりわけ倫理的場面に着目してわれわれが営む（べき）「人間的関係」という概念を再構築しようとするものだ。

・筆者が考えるに、こうした試みは、C・ダイヤモンドが（人間と動物にみられる様々な差異と区別して）人間と動物の単数形の「差異」を論じる際に述べている「人間という観念の構築」と類似している。

「人間に対する義務についても同様である。それは人間であるということから導かれる結論ではないし、人間とはこれこれの存在であるということによって正当化されるようなことでもない。それ自体が、人間という観念を構築しようとするひとつの試みなのだ。人間と動物の間には違いがあるという考えも、——まさしく——そういった試みなのである。私たちは、私たちが彼らを食べる食卓につくことで人間とは何かについて学ぶ。私たちは食卓を囲むが、動物は食卓に並ぶのである。人間と動物の違いは、〔チンパンジーの〕ワショーやイルカの行動を研究しても得られない²¹」。

²¹ Cora Diamond, *Eating Meat and Eating People* (1978), in: *The Realistic Spirit: Wittgenstein, Philosophy, and the Mind*, Cambridge/Massachusetts: MIT Press, 1991. (横大道聡訳、キャス・R・サンステイン、マーサ・C・ヌスバウム編『動物の権利』、尚学社、2013年所収、133頁)

- ・ダイヤモンドは、このような「構築」の意味をG・オーウェルがスペイン内戦の際、両手でズボンをたくし上げながら逃げるファシストを撃つことができなかったという記述をもとに説明している。

「私がここに来たのは、「ファシスト」を撃つためであった。しかし、ズボンをたくし上げている男は「ファシスト」ではない。それは明らかに私たちと同じ同胞であり、どうしても撃つ気にはなれないのである」。ここでは敵（ファシスト）という概念と同胞という概念がある種の緊張関係にある。ズボンを両手でたくし上げながら走る男を撃つことができる者ですら、なぜオーウェルが撃てなかったかを完全に理解することができるだろう。ズボンをたくし上げて走る男のようなイメージや光景は、ある人の行動を確認したり変更したりする「何か」を伴う。しかし、その「何か」に強制力はない。言い換えると、その「何か」は、それが有している力や、すべての者に対してではないにせよ、その「何か」が誰かに不快感をもたらしたり不快感を意識させたりする可能性があるということを理解できる者すべてに対して、強制力を有するものではないのである」（Ibid. (同上、143頁))。

- ・特徴（ズボンをたくしあげている）や能力（武器を捨て殺傷能力をもたない）から権利（殺されない権利）を導き出す議論（ウォルツァー）ではない。
- ・オーウェルに敵を「同胞」（同じ「人間」）として見させた「何か」は、すべての人にそのようにさせるような強制力をもたないが、オーウェルと同じような行動に出ない（任務に忠実に逃げるファシストを撃つ）兵士もオーウェルの感情を理解しうる。
: 人間についてのこうした記述は、すべての人が従うべき規範や原理にはなりえず、われわれが「人間」という概念を再構築するなかで何らかの指針となりうるようなものなのだ
⇒時に極端な状況や表現を用いて記述されるレヴィナスの「形而上学」